彼女の余命はもう短いそうです

zens

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彼女の余命はもう短いそうです

【Ｎコード】
Ｎ６４５４Ｊ

【作者名】
ｚｅｎｓ

【あらすじ】
ある日、少年は少女と図書館で出会った。そこから始まる短い恋のお話し。

僕が彼女を初めて見たのは、町の図書館だった。
決して大きくもないその図書館に、毎日足しげく通っているにも関わらず、初めて見た彼女は普通の女の子といった様子はなかった。
何1つ模様もない白のワンピース、真っすぐで艶があり、柔らかそうな黒髪。
普段ほとんど人のいないこともあり、物珍しさもあって僕はつい声をかけていた。

「ラノベは好き？　それ、最近話題のラノベだよね。読み終わったら貸してくれませんか？」

しばらく返答がないので無視されたのかと思い、立ち去ろうとすると不意に彼女の視線がこちらに向く。
その向いた目はどこか気だるげで投げやりなものだった。

「違うわ。あなたにはラノベに見えるのかもしれないけど、これは高尚な小説なのよ。森鴎外、分かるわね？」

彼女はそう言うがどう見てもそれはラノベなのだ。
絵のあるページを開いていることもあって分かるのだけど、それは表紙の絵柄とも一致する。
もう1度言おう。どう見てもラノベだ。
しかし、彼女は尚も否定を重ねる。

「まだ信じていないのね。まったく困ったわ」
「それはこっちのセリフですよ。森鴎外だなんて嘘をどうしてつくんです？　ラノベを読んでいるのを見られたことが恥ずかしいんで

すか？」

すると彼女はいいえと首を横に振った。

僕はその意味が分からず、彼女にその意味を尋ねた。

彼女は、分からないの、と呟くと本を閉じて、ブックカバーを取り外して俺のその本を渡してくれた。

そして、本を受け取るために伸ばした僕の右手を彼女は両手でそっと握った。

「私、あなたとお話ししてみたかったのよ」

「はい？」

あれ？　これは新手のナンパだろうか。

いや、もしかすると、宗教の勧誘かもしれない。親しくなったら壺を売る気に違いない。

肉壺なら喜んで買うだろうけど、普通の壺はいらない。

でも、それは援助交際と呼ばれるわけで、いいものではないわけで……。

でも、一生童貞でいるくらいなら金払ってでも1度くらいはと思わないわけでもない。

でも、そういうのは関係が進んでからするものであって、金銭関係でするものではないはずであって……。

……って、待て、落ち着け。

この目の前の彼女は、目的を言ってないじゃないか。

僕は彼女の口を注視して言葉を待った。

「私、余命が短いの」

初めて彼女と出会った日。
僕はいきなり彼女に告白をされた。
それは甘い告白ではなく、酸っぱいような辛いような不思議な告白だった。

それから数年後。
僕らは同じ大学へ進学し、卒業後の結婚の約束も交わした。
僕は今日は久しぶりに大学へとゼミの用事で訪れており、彼女はその付き添いである。

「……初めて会った時、余命が短いって言ってなかった？」

あの日のことは今でも思い出すことができる。
本を読む姿が印象的だった彼女。

その彼女からたった1度だけ余命が短いと言われ、それからは2人で1日1日を大切に過ごしてきた。
しかし、一緒に時間を過ごすにつれて同時に疑問も湧いてくる。
それは、嬉しいことであり、不思議なことだった。

そして、今日。僕が彼女に今さっき思い切って聞いてみたのだ。
それに対して彼女は嫌な顔1つせずに答える。

「あら、短いわ。あなたといる時間はいくらあっても足りないもの

よ。70年あっても足りないわ」

その堂々たる態度に僕は感服という言葉が脳裏に浮かんだ。

「それが余命の正体か」

「そういうこと。どうして人って有限の生しかないのかしら。人の一生ではあなたを愛するには足りないというのに」

「そういう風にできているんだから仕方ないんじゃない？」

「……面白くないわ」

僕の答えにやや納得していない様子だった彼女は少し逡巡した後に、でも、と話を切り出す。

「あなたから告白してくれたときは嬉しかったわ」

「1日でもずっと一緒にいたいって思ったら告白してた」

「衝動的ね。そんな所も好きよ。で、本当の意味での告白はまだかしら？」

む？

本当。この言葉に僕は思い切りむせ返りそうになった。

まさか今更、あのことを蒸し返されるとは思わなかったからだ。

しかし、ここは男らしく、恋人らしく隠し事はなしでいこう。もやもやしたものを思い出したままこれから一緒にいるのは辛い。

「実は抱きたいと思ってた」

「は？」

……初めて会ったときから気付いていたなんて。

隠し事は出来ないものだ。

「手を握られた時から変なことばかり意識していた」

よし、言ったぞ。

僕は言ったぞ、やった、やった。

しかし、浮かれる僕とは違い、彼女は渋い表情になり、滅多に見せない深く思慮する顔になっていた。

しばらく黙って待っていると、彼女は僕の鼻にびしっと右手の人差し指を突きつけた。

「……１０００年の恋も冷めるってこんなことなんでしょうね」

「え？」

「……今日は帰るわ」

急に背を向けてすたすたと歩き去る彼女の姿に僕は唖然とその背を見送るしかできなかった。

これって破局？　うん、そうだ。そうに違いない。

テレビで芸能人がよくなるあれだ。

それがまさか我が身に降りかかるとは思いもしなかった。

しかし、これは現実だ。

そして、その原因はまず間違いなくさっきの僕の発言でしかない。

今から急いで走れば間に合うだろうか。

いや考えるのは後だ。

「ちょっとま――っていない！？」

考えている間に全速力で走っていたのか彼女の姿は見えず、慌ててあたりを探すもどこにも姿がない。

本気で愛想尽かされたんじゃ……。
携帯に電話しても繋がらないし、メールも返事は来ない。
こんな形で6年の交際が終わるとは……。
失恋は男の方が引きずると言うけれど、まさに今、僕は引きずったままだった。

「かむばーーーーーーーーっっっく、――――」
「恥ずかしいからやめなさい！」
その言葉と同時に後頭部に痛みが走った。
振り返るとそこには彼女がいつの間にか立っていた。
おかげで名前まで叫ぶことはできなかった。

「で、どうして叫んだのかしら？」
「理由か。それは――」

彼女は僕が破局のショックで大声で呼ぼうとしたということを聞くと心底呆れたように溜息をついた。

「まったくもう……。あれは冗談よ。ほら、そんな情けない顔をするんじゃないの。１０００年の恋が終わっても、これから新しい愛が始まればいいのよ」
「……」
「だいたいね、6年も付き合っているんだから、あなたが私だけに変態であることくらいとうに知ってるわよ。私がそれを理由に愛想を尽かすことなんかないんだから心配しないの。それとも、なーに？　私のこと、信用できない？」

出会いからして嘘まみれだったので、今更信用も何もないと思う

んだけど。

「信用してなかったら6年も付き合うもんか」

とは言え、思った事などおくびにも出さず口は動いていた。

「あら、惰性ってものはあるわよ」

しかし、まったくもって彼女に信頼されていないようだ。

元々他人の表情に敏感な彼女には通用する由もない。

それはそうと道の真ん中でいつまで話していると邪魔でしょうがない。

さっきから人が僕らを避けて通っている。

「少し邪魔みたいだからこっち寄ろうか」

「さっきまで泣き叫んでいたとは思えないほどの冷静さね」

「何度あのやりとり繰り返したと思ってるのさ」

数えただけでも１０は超えるのだ。

ちなみに毎回律儀に僕が彼女の名前を叫ぼうとするところを彼女が止めるというのが恒例になっている。

「あら、気を惹きたいからやっているのだと思ったわ」

「それ以外に何の目的があるのさ……」

人の通る道を避けて歩いていると、汚い噴水のある階段へとやってきた。

ここは汚い、臭い、暗いの３Ｋの揃った大学最凶スポットであり、ここに来ればどんなカップルも別れられると評判の場所だ。

あまり人が寄りつかないのでよく2人で訪れる場所でもある。
「で、本当の意味での告白はまだかしら？」
「――っ」
「冗談は2度は許さないわよ」
「ラノベは好き？」

怒るかな。
真っ当に言うのも恥ずかしいので、ちょっとばかり茶化してみる。
しかし、僕の予想に反して彼女は怒る様子さえみせることもなく、ただ静かに言うのだった。

「違うわ」

ああ、覚えていたんだ。
初めて僕が彼女に言った言葉。そして、初めて彼女が言った言葉。
それが嬉しくて僕は笑った。彼女も僕につられたようで笑顔を見せる。

「これからは毎日、愛してるの言葉が聞けるのね」
「今のうちに言い溜めておこうか。愛してる、愛してる。2日分になるかな」
「バカ」

そんなことを言いながらも満更でもない様子で彼女は僕の右腕にそっとその左腕を絡ませた。
そして、僕を引っ張るように歩き出すと言うのだった。
「愛の余命は1日よ。でも、毎日補充できるからちゃんと補充してね」

「容量少ないなあ」
「毎日顔を合わせて話をしていれば平気よ。難しいことじゃないわ」
「それが一番難しいって分かって言ってるよね」

その問いに彼女は花が咲くような笑みで答えた。
彼女の笑みの余命もまた短いけれど、僕はその余命が尽きるまでその笑顔を見守ろうと思う。
そして、いつか本当の余命が尽きるとき。僕らの共に歩んだ時が、お互いにかけがえのないものとなるように彼女と一緒に一歩ずつ歩いていこう。

この気持ちに余命がないことを信じて。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6454j/

彼女の余命はもう短いそうです

2010年10月11日23時39分発行